

比庵佳境の会



山河を遠く離れてふるさとを
たぐ柿栗におもほゆるかも
比庵九十二

柿と栗

昭和49年

清水比庵ゆかりの地を訪れて

山種美術館参与 榎淵 豊子

はじめに

まずはじめに、清水比庵と私の出会いをお話ししましょう。私は昨年まで山種美術館に学芸員として勤務していました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、山種美術館は、創立者の山崎種二の個人コレクションから出発した美術館です。そのため、開館以前に収集された作品は、もちろん彼の審美眼に合った作品であるのですが、計画的にテーマを決めて収集されたわけではなかったこともあり、展覧会を企画する際に、テーマ的に扱いにくく一度も展示されていない、いわゆる死蔵されている作品も多くありました。

二〇〇三年頃から私は資料カードに貼付された不鮮明な写真をたよりに気になる作品を洗い出す作業をしました。多くの資料カードの中から何故か、清水比庵の作品《野遊》と《観梅》に吸い寄せられるように目がとまったのです。小さなモノクロ写真にもかかわらず、作品が持っている「魔力」とでもいうのでしょうか、どうしても気になり、倉庫まで調査に行きました。作品を前に、何とも穏やかな気持ちになり、その柔らかな画風と伸びやかな文字に惹かれ、魅了されてしまいました。恥ずかしながら、当時の私、いえ、山種の学芸部には比庵の資料はなく、誰も彼を知りませんでした。「比庵って誰？」…これが比庵との最初の出会いです。

私は、山種美術館において川合玉堂展を三回担当しています（没後五〇年記念特別展「二〇〇七年」「生誕一四〇年記念特別展」二〇一三年、「没後六〇年記念特別展」二〇一七年）。二〇〇七年の展覧会の際に作品を拝借するために青梅の玉堂美術館に初めて訪れた時に、入口手前に建立されている歌

碑にたまたま目が留まりました。「おや、比庵！」こうして再び比庵に出会ったのです。玉堂と比庵、そして弟の三溪の三人に親交があったこと、三溪が東京証券取引所に勤務していたため、山種美術館の初代館長で山種証券社長の山崎種二とも面識があったであろうということまでは知っていませんでしたが、当時はそれ以上詳しくは知りませんでした。そこから今度は玉堂と比庵の関係について調査が始まり、二人の往復書簡について、二〇一七年の川合玉堂展図録に拙稿を掲載させていただくことになったのです。

「没後六〇年記念特別展 川合玉堂」（二〇一七年）の図録で「詩歌をとおしてみる素顔の玉堂―清水比庵との往復書簡を中心に」を執筆する際に、資料をたくさんお貸しくいただき、多くのご助言をいただき、大変お世話になりましたのが、比庵のお孫さんで本会会長の清水固氏です。そしてこの度、笠岡への旅行にお誘いいただき、得難い体験をさせていただきました。今回の旅の紀行文を仰せつかりましたので、以下、時系列に沿ってご紹介いたします。

令和元年六月二十二日

笠岡威徳寺、城山公園、竹喬美術館へ

午前中、折角笠岡まで来たのだからと、笠岡駅近くに店舗を構える画商の豊池氏のご厚意により、比庵さんの菩提寺・威徳寺にご案内いただき、清水家のお墓参りをさせていただきました。お墓には「清水比庵夫妻之墓」、側面には

「まどかなる 夢をむすぶと いふことの
いかにまどけき ものにあるかも」

と彼の踊るような文字が書かれ、比庵さんらしい優しさが満ちていました。

境内には昭和四四年に『窓日』創刊五〇周年に際して建立した歌碑もあり、比庵さんがいかに多くの方々々に尊敬され、愛され、慕われていたのが実感を持って私にもわかり



比庵墓碑

ました。

「屋根の間に 城山の松 少し見え
涼しき月を 高くへ上げたリ」

その後、城山公園内にある堂々たる歌碑を
を観に行き、まさに城山の広場の生い茂る大
きな松と海を眺めてまいりました。

「城山の 上の広場に ただ射せる
朝日より見る 海のある町」

この城山は比庵さんの散歩コースであつ
たといえます。少し私もその辺りを歩いてみ
ましたが、坂道の勾配が結構急で、老齢にな
った比庵さんが散歩していたとすると、かな
り健脚でいらしたのだと感心しました。

一旦くだり、坂の途中に連歌師・宗祇の
休石や芭蕉の句碑があります。「宗祇休石」
とされる大きな石、そして

「山松の かけやうきみる 夏の海」
の句が書かれています。明応三（一四九四）
年三月、西国へくだる宗祇が笠岡の陶山一族
を訪ねて詠んだ句とのこと。その横に別
名「鏡石」とされる、芭蕉の丸い句碑があり、
そこには「世の中はさらに宗祇のやどりかな」
（『笈日記』）と彫られていました。

さらに歩いていくと眼下に瀬戸内の穏や
かに光る海が広がり、思わず深呼吸。ああ、
磯の香！下つて登つて、次は稲富稲荷神社へ。
二日間の旅行が無事でありますように、と参
拝いたしました。

昼過ぎに清水固氏とご同行の皆様と合流
し、豊池氏の美術店にて比庵さんの作品を堪能
させていただくことができました。「比庵
雀」のなんと可愛らしいこと！晩年の気負わ
ず伸び伸びと描かれた作品に目を奪われまし

た。

その後、笠岡市立竹喬美術館の「比庵さ
んが目指した 万葉の世界」展へまいりまし
た。館長の上園氏にご案内いただき、ゆつくり
鑑賞することができました。（ご多忙にもか
かわらずお時間を頂戴し心から感謝申し
上げます）本展では、比較的若い頃、日光時
代の「ヒ舟」の作品もあり、作品の全体像を
通史として俯瞰で観るためにも良かったと思
います。竹喬美術館の展覧会紹介文に「比庵
さんはこの歌境を心の貧しさという言葉で表
し、『心の貧しきもの、悲しみのわかつてあ
るもの、結局悲しいものではなく幸福なも
のなのである』とも述べています。寂然とし
た語観から導かれるこの心情を、簡明な歌と
して詠み、大拙の書として記し、艶やかな絵
として描きました。」と書かれており、私は
この文を読んで、『聖書』の「山上の垂訓」（マ
タイによる福音書五七章、「ルカによる福音書」
十六章）を思い出しました。「心の貧しい人た
ちは幸いである、天国は彼らのものである。」
結局、比庵さんは「野の花を見よ。思い煩う
な。」と同じ境地なのでしょう。それは「比
庵が彼方の目標としたのは、自らの歌心を率
直に託すことのできる万葉歌の世界」とも繁
がるのだと思います。

竹喬美術館にほど近いところにまた歌碑
が設置されていました。地元の皆様が比庵さ
んをどれだけ尊敬しているのか、よくわかり
ました。

「柳はみどり 花はくれなゐ 食べものは
天から糸つくり 酒はのまねど」



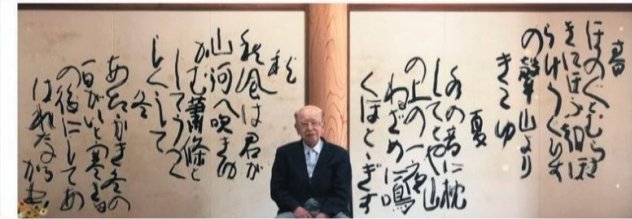
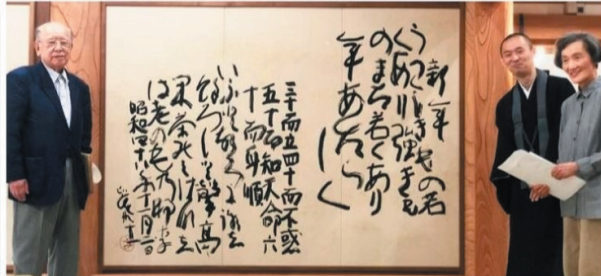
歌碑笠岡

私は歌を拝
見しながら
ら、比庵さ
んの飄々と
した顔のお
写真を思い
出していま
した。

令和元年六月二十三日
倉敷の安養寺、歌友故秋田秋良氏のお宅訪問

この日は朝から倉敷の安養寺へ大勢で大
移動です。「朝原山安養寺」は、創建は奈良
時代に遡り、仙人、救世の行者と賛される高
僧報恩大師が国家祈願の寺として開山した寺

陶板書



です。この由緒正しきお寺の襖に比庵さん
の書があるという。もつとも正確には本物は
保存のため市立美術館で保存され、新築され
た室内にあるのは陶板画の複製ではありません
が、大塚オーミ陶業という会社をご存知でし
ょうか。昨年末の紅白歌合戦で米津玄師さ
んの中継で使われて有名になった、徳島県鳴
門市にある大塚国際美術館の親会社と言つ
たら、ああ、知っている、と思われる
方もいらっしゃるでしょう。そもそも
食器などの陶器を製造する会社ですが、
昨今では陶板による名画の複製を手掛
け、名画の繊細な色調や風合いを再現
することに非常に長けています。大塚
に依頼して制作して貰ったという陶板
画は、文字はもちろんのこと、和紙や
金砂子等の風合いまで忠実に再現して
おり、ひんやり冷たい感触の表面に触
れて始めてこれが陶板でできているこ
安養寺さんでは、前ご住職の奥様を
はじめ、ご住職とご家族の皆様に、大
変親切にご対応いただき、お忙しいと
ころ私どものために丁寧なご説明を頂
戴し、非常に恐縮しました。

その後、またまた大移動し、比庵の
歌友・故秋田秋良氏のご息である征
矢雄氏（八九歳）とお孫様の待つお宅
にお邪魔し、秋田家の比庵さんの作品
を拝見させていただきました。「片隅の
美術館」と銘打って、お部屋に所狭し
と比庵作品を展示されていました。そ
の作品数と内容によって、秋良氏と比
庵さんとの親しい間柄を推し量ること
が容易にできるラインナップでした。
戦中の作でしょう、皇国に任せ、竹林
を開墾して芋・麦畑にしたが、そこに
出てきた筍を食べて「うましたけのこ
ありがたきたけのこ」と老人がお茶
を飲んでいる絵が添えられているのが、
秀逸でした。直接的に反戦を声高には

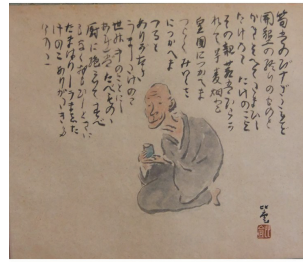
新年	うつくしきもの 若くあり 強きもの また若くあり 年あたらしく
春	ほのほのと むらさきにほふ 朝ぼらけ うぐいすの聲 山よりきこゆ
夏	水の音に 枕してとや 山の上の 一夜ねざめに 鳴くほととぎす
秋	秋風は 君が山河へ 吹きゆかむ 蕭条として うつしくして
冬	あたへかき 冬の一日が いと寒き 日のあとにして あはれるなかも

三十而立 四十而不惑
五十而知天命 六十而耳順

いふところ よろしよろしと 聲高き
茶のみばなしは 老のものなり
昭和四十八年十一月二日
比庵九十一

菊のひすぎたれど開墾の終りのものと
かきそへてたまひしたけのこたけのこよ
その親数はひらかれて芋麦畑と皇国に
つかへまづらくみいさにつかへまづると
ありがたきうましたけのこ
世の中のことにしあればたへもの厨に絶えて
すべもなくおもひしときにたまはりし
うましたけのこありがたきたけのこ 比庵

昭和二十年 比庵六十三歳



言わないのですが、ウイットを利かしながら、
冷静に戦時中の状況を見つめている姿は、玉
堂さんととてもよく似ているのです。秋良氏
もきつと相通じるところがあつたのでしよ
う。だからこそそのご友人関係なのだ勝手に
想像してしまいました。秋田家の皆様には素
晴らしい作品を拝見させていただきました、深く感
謝申し上げます。ご準備も大変だったと存じ
ますし、何より大勢でお伺いして長々とお時
間を頂戴して、お忙しい思いをさせてしまい
申し訳なかつたと反省しています。

終わりに

嘗て資料カードの中から、比庵さんが私
に茶目つ氣たつぷりにウイנקをしてくれたの
ではないかと思えるほど、気になった作品た
ち。そしてそれらの作品から比庵さんのお孫
さんである固氏へ導かれ、そこで多くの方々
とお知り合いになりました。まさに「ありが
たや ありがたや たゞありがたや」です。
比庵さんにいただいた不思議なご縁を大切に
いと思つていきます。

比庵と秋良 時代を打ち抜く二人の関係

秋田展生

当会の会長、清水固様は比庵先生の令孫
ですが、私は比庵先生と親交の深かつた秋田
秋良（シュウリョウ）の孫にあたる秋田展生
と申します。

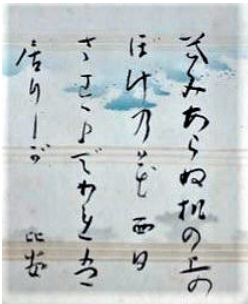
祖父秋良は、若くして文芸の道を志し、
サラリーマンや百姓で生計を立てながら田舎
の歌人として一生を送つた人でした。そして、
短歌を通じて比庵先生の令妹岡本章子さんと
出会い、交流が始まり、これが比庵先生との
出会いにつながります。

気心の合つた二人は、以降三十余年、現
代であればメールやツイッターのように葉書
や手紙によるやり取りを続け、互いの親交と
芸術観を深めていきます。

その間、幾つかの比庵作品が秋良に届け
られましたが、それらは大切に保管され、秋
良の死後息子の征矢雄が軸や額に表装し、現
在秋田家に伝え残されています。

私から見れば、秋良と比庵先生の関係は、
単なる共通の趣味を持つ者同士の付き合いを
超えた高い精神性があり、残された作品や葉
書には、その思いが投影されているように感
じます。

まずその作品の一部を紹介します。



「きみあらぬ 机のうえのほけの花 西日
さすまで われはおりしが」
これは、昭和二十年四月比庵先生が秋良を
訪ねて職場まで行ったが、不在だった。夕刻
まで待ち続けたが結局会えなかつたこと無念さ
を滲ませた歌です。
一方の秋良は日記の中で、「相互鶴首の日
を相会へず残念至極」と嘆いています。
遺族としてこれらの作品や葉書を見るにつ
け、死後数十年を経過してなお人を引き付け
る魅力を放っていることに驚かされます。物
がなかつた時代の方が心豊かだったというこ
とでしょうか。そんなことを思わせてくれる
二人のやり取りを今楽しませてもらつていま
す。



最も有名なツーショット

一 たへまこととはり主

比庵先生は、秋良に「たへまのみこと」と
「こととはり主のみこと」の二つの綽名を呈
上しています。これは、秋良の人やものを褒
め讃える点と、徹底的に遠慮し控える性格を
表したものです。（頼まれごとは三度断り、
四度目に渋々受けるのが美德と言ったとか）
夏の恒例行事である笠岡沖の舟遊びでは、

釣った魚が余つたので秋良に持つて帰れと言
つても固辞して比庵先生に「捨ててしまえ」
と怒鳴られたり、鈴音会の指導を秋良のため
を思つて依頼しているのに、決して了解しな
かつたりと互いに焦れる場面を繰り返しながら、
付き合ひの度合いを深めていきます。秋
良の性格は、比庵先生の対極にあり、先生は
秋良の断り続ける態度に激昂しながら、その
文芸への思いや短歌の力量に敬意を払い続け
ます。

比庵先生が秋良を詠んだ歌

△ 屋根屋根の 屋根の物干しの 風景をた
たへておはず たたへぬしのみこと
△ 風吹きて その故としも あらねども
こととはり主の みこと来たらず
△ いしがみの たたへ歌よろし たたへま
の みことの歌と いふばかりける

歌だけではなく、葉書や手紙、そして下野
短歌「駒込だより」にまで、秋良の二面性に
触れた文章が多数残されています。怒りなが
らも秋良を思いやる比庵先生の気持ち伝わ
ってきます。

二 いづれを履かむ・・・

今回の比庵・秋良秘話は、秋良の故郷大島
村柴木（現在の岡山県浅口市寄島町）の孝子
伝「孝子甚助」にまつわる話です。

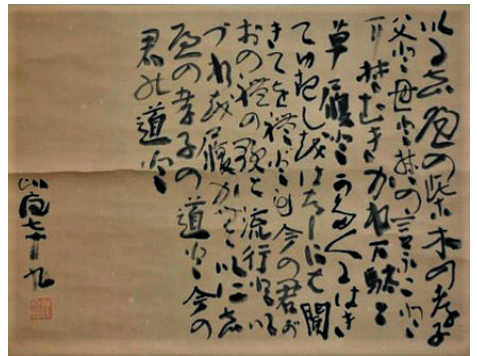
大島村柴木に親孝行で知られる下原甚助と
いう青年がいました。ある日、親兄弟に代わ
つて池の改修工事に向かうとする甚助は、
昨夜の雨で足元が悪いから下駄を履いて行く
ように言う母と、草履の方が作業しやすいの
で草履にしまさいと言う父の間で苦しい立場
に置かれます。考え抜いた甚助は、片方の足
に下駄をもう一方に草履を履き洋々と出かけ
て行きました。

話は変わって、比庵先生は、「下野短歌」昭和二十六年二月号の中で歌を作るといふことについて、以下のように述べておられます。「歌友といへば笠岡の近在にはA君がある。若いときから歌が好で日曜日といへば袴を歩いてその附近の歌会を廻って歩いた。それで百姓たちが袴をはいたA君の姿を見ると、またAさんが歌会へ行く、もう幾段に進んだであらうか、と歌と碁とを混同してゐたものである。それがこの頃歌を作るといふことに閃々としてゐるといふ。それは時流の歌があまり自分とかけはなれた為、一方ではそれを軽蔑してゐながら、全くそれを無視することも出来ず、進退に迷つてゐるといふ。

それで小生は、例の持説を試み、歌は楽しみに作るといふことは万人同じである、と同時にまた歌は佳作を得たいといふことも万人同じである。但この楽しみと佳作とに自ら軽重があつて、成人は楽しみつつ佳作を得ようとし、また成人は佳作を得つつ楽しみます。と、佳作を楽しみよりも先にする心は自然に流行を追ふ心となつて、多くの歌人は不知不識之に傾いてゐる。しかし之が果して佳作を得る道であらうか、といふことについて小生は以前から疑問を抱いてゐる。寧ろ歌は楽しみを先にし、その楽しみが歌に浸透したところで佳作を得るのではなからうか・・・(略)

いにしへの柴木の孝子
父と母とその言ふこと
にそむきかね下駄と
草履とかたかたにはき
てゆきしをはなしには聞
きておれども今の君が
おのれの歌と流行とい
づれを履かむいにし
への孝子の道と今の
君の道を

A君とは秋良のことですが、比庵先生は、



作歌のスタイル、スタンスについて自身の考えを葉書などで伝え続け、(おそろく秋良も自身の考えを比庵先生にぶつけて)幾つかの長歌、短歌を経て、この作品に至ります。

この長歌は、比庵先生が孝子甚助の下駄と草履の伝説に、秋良が流行の歌と自身の作歌スタイルとの間で悩む姿を重ねて、「どうするの？」と問いかけているのです。

東京と岡山に離れて暮らしていても、葉書や短歌で芸術論を戦わす二人の間には激しい火花が飛び散り、他者の入り込む余地などありません。この作品の陰に隠れた丁々発止のやり取りこそ二人の関係を象徴するものであり、それ故私はこの作品が最も好きなのです。



秋良は、自室の床の間にこの作品を終生かけ続けたといひます。色褪せ、ひび割れた掛け軸が、二人の思いを今に伝えていひます。

三 ほのぼのと・・・

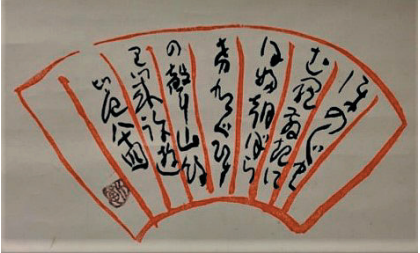
次の話は、窓日笠岡支社「鈴音会」に關係するものです。

鈴音会は、比庵先生が指導する女性を中心とした歌のグループです。比庵先生は、この会の指導を秋良に依頼します。昭和四十年、比庵先生は宮中歌会始の召人に選ばれます。上段の写真は、昭和四十一年一月十六日、秋良を含め会員でその榮譽を祝福している様子です。そして、こたつの上に置かれた小切れが次の作品です。

作品については、説明不要と思ひますので省略し、比庵先生から秋良に送られた葉書を紹介します。

この葉書には、召人に決まつたことで方々から電報、電話がひっきりなしに入つて頭があつくなつたという近状と、秋良が鈴音会の例会に出席してないようだから出席するよう要請していることが書かれています。

鈴音会は、妹の岡本章子さんが生前属して



いたこともあり比庵先生には重要な会であつたと思われませんが、その指導を秋良に託すあたりは、比庵先生の秋良に対する信頼のほどが窺われます。

四 あきら歌

これは、「日附入り歌」です。

「下野短歌」昭和三十六年二月号に、比庵先生の次のような文章が掲載されています。

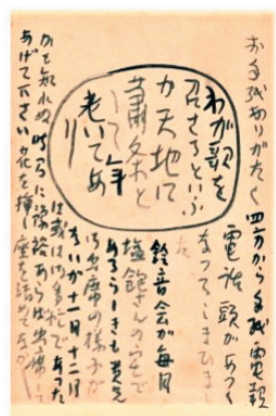
「郷里のA君から手紙が来た、歌が書いてある・・・(略)・・・十一月二日午後より雲垂れて野焼きの煙窓に匂ひ来」：(略)・・・といふやうな日附入りの歌が十七首並べてある、之がA君発明の日附入りの歌である。

歌詠みは絶えず歌を作つてゐなければならぬ・・・(略)・・・そこで日附入りの歌

にまた立ち返つていふと、この日附入りの歌を作つてをれば、その日附自身が楽しい動機となり、平凡なる今日が忽ち楽しい今日となる。然りこのやうな安易な歌なら幾らでも出来るといへるであらう。いくらでも出来る歌を作つて楽しめることをA君が教へてくれるのである・・・(略)

「下野短歌」昭和三十八年八月号には、

「A君の日附入りの歌はどうも佳いので、何故によいかと考へてみると、日附入りの歌は、何月何日



と日附を入れることで歌の初句或は二句までも取られてしまふ、それで歌の内容は三句以下で片けねばならぬ。それで詞をぎりぎりまで節約せねばならぬ、それが歌を佳くする原因であるかと思ふ。それは必ず佳くなるとはいへないけれど、詞が多すぎるよりはよくなる。」

さらに、「下野短歌」昭和三十四年四月号には、

「A君の発明に月日入りの歌がある。『一月十日午後を崩れて雪時雨しづく厨に味噌豆を煮る』といふやうな歌である、小生は此月日入りの歌に注目してゐる、．．．(略)．．．それで一同之からは毎日月日入りの歌を作ることによつてといふことでもとても愉快なことになった。この月日入りの歌をA君の雅号を取つて「あきら歌」と小生は呼ぶことにしてゐる。」

比庵先生と秋良の関係は、単なる趣味を通じた友人ということを超えて．．．と何度か紹介しましたが、ここでは作歌における技術的な思想を戦わせています。二人は双方に影響を与え合っています。比庵先生もあきら歌を意識した歌を詠んでいます。

△ 二月二十日 画のかけない日 曇つた日

悪い日 君の手紙だけはよろし

△ 茲(ここ)に書く 歌の無きため

投函が 一日遅れ 九月二十日夕

湧きあがった感情を歌に変換して葉書や手紙書き記し、受け手が返事を返さずにはいられない状況にするところが、単なる友人関係を超えていると思います。

五 章子の残照

比庵・秋良秘話のこの項は、番外編で比庵先生の妹「岡本章子さん」です。そもそも比

庵先生と秋良を引き合わせたのは章子さんですが、その出会いは次のようだったと秋良が記しています。

「昭和五年二月十二日、この日、町の料亭『ふたば』の女将、小林しづさんの朝日新聞懸賞小説当選の祝賀会が、母校笠岡高等女学校で催された、その慌ただしい席上であつた。初対面の岡本章さんは、黒眼鏡をかけた小柄の温和な夫人と云う印象位で、会話の時間もなく、人柄など詳しい事は無論わからなかつた．．．(略)．．．」

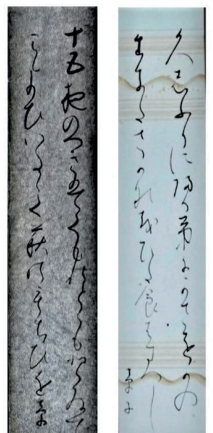
その日の記念歌会は、地方稀に見る盛会で、詠草も二百首を超えた。その中で岡本章さんの歌が最高点となり．．．(略)．．．司会者の私が大いに緊張して祝辞を述べた．．．(略)．．．当日の岡本章さんの歌は、おぼろかに 月あるらしも 水明かり 更けてしめらふ 蛙の声かも

△ 水の匂ひに すみつつ行けば 屋の風 うすら光りて さざ波に立つ
これが機縁で、其の後しばしば岡本章さん宅で歌会を開くようになり、歌と共にその人柄に吸引されて、だんだん親交の度を加えて行つた。その間、令兄が日光の町長であり、雑誌『二荒』を主宰されていることなどをかきされ、．．．(略)」



岡本章子

秋田家には、比庵先生が秋良に宛てた葉書が多数残されていますが、最古のものは「昭和十四年十二月六日」です。また、岡本章さんから秋良に贈られた短冊も複数残されています。



久しぶりに帰る弟に笠岡の

生きた魚をひた食はずべし

十五夜の月はくれどのぼりあて

こよひいただく萩のもち(餅)ひを 章

岡本章さんの作品では、川合玉堂先生との合作が有名ですが、右の短冊などは多くの人とつとて珍しく感じていただけるのではないのでしょうか。

岡本章さんは、鈴音会の歌会で残つた茶菓子をこっそり秋良の自転車籠へ忍ばせて持つて帰らせた逸話が残る気配りの人でした。(ことはり主の命は、決して残つたお菓子など持つて帰る人ではありません)料理上手で特に五目ずしは絶品であつたと秋良は評しています。むろん、短歌のレベル、筆さばきも同様。

秋良は、比庵先生だけでなく、岡本章子さんとも歌を通じた高い精神性の中で楽しくお付き合いをしていたことがわかります。

六 永遠の友情

比庵・秋良秘話の最後は、二人の友情についてです。

昭和三十八年八月、秋良は比庵先生から夏の恒例行事である笠岡沖の舟遊びに招待されます。当日は、鈴音会の三美人(?)塩飽香代野さん、柳生春乃さん、仁科秀子さんと一緒に飛鳥沖の魚釣りと、舟上での茶会、歌会と優雅な一日を過ごします。

この時秋良は、比庵先生が秋良を題材にした歌を短冊にして欲しいとリクエストしま



す。果たして後日、十六夜の観月歌会後にそれはプレゼントされます。それが、この短冊です。

△ 山をとこ 秋田のみこと 釣る魚は ほかのみことに つれぬ魚かも

そして、下段の作品は、カラフルなくちなしの花や百日草に目がいきがちですが、そこに詠まれた歌に注目してください。
△ 画をかきて 歌を詠みても 樂しめど 君のあるこそ なほたのしけれ



このあたりの感覚が、書家の濱崎道子先生をして、ラブレターと言わしめるところなのでしょう。

この歌は、その後秋良が不慮の事故により急逝することを考えれば、何とも意味深な内容です。この作品が秋田家にある理由もそこにあるのだと思います。

さて、比庵先生と秋田秋良の秘話をいくつかお伝えしてきましたが、いかがだったでしょうか。二人の永遠の友情に思いを馳せながら、秋良(終了)といたします。ありがとうございました。(完)

清水比庵の歌（六）

「窓日」編集長 秋葉 貴子

年明けて八十八歳すこやかに
柳はみどり花はくれなゐ



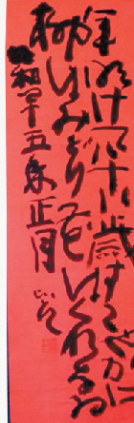
清水比庵は明治十六年二月八日、現在の岡山県高梁市に生を享けた。たまたま旧暦の元旦であった。本名は元且生（もとよし）の豊臣秀吉に因んで「秀」と命名された。掲出の歌は昭和四十五年、心身健やか（こみんけんやか）のうちに、八十八歳を迎え感慨を込めての作と思われる。同じく次のような歌もある。

旧元日日の出に生れ秀といふ
名さえめでたき弱虫泣虫なりき

そしてまた、弱虫ゆえに用心して長生きをし、泣虫ゆえに、歌詠みになった、という歌もある。生涯みかけは華奢な体躯であったと思う。

八十八歳「米寿」この歌に於いては、その健康を自認し「柳はみどり」「花はくれなゐ」と、自らを称えた、そこには比庵の心意気が偲ばれる。

比庵八十八歳の頃は最も芸術の境地盛んな時代でもあったと思うし、この上句を受けた下句からは、その覇気が伝わってくるようにも思われる。



年明けて八十八歳すこやかに
柳はみどり花はくれなゐ

昭和四十五年正月 比庵

佳境とは

事務局長 比留間 哲生

日経新聞日曜朝刊の文化欄に毎週「遊漢字学」という阿辻哲次さんのコラムがあります。普段使っている漢字の成り立ちを教えてくださいの私にとって興味深いものです。阿辻さんは比庵と同じ京都大学出身で漢字について白川静さんと双璧をなす方です。

毎週楽しみに漢字学を待っている比庵佳境の会の会員として九月二十二日付け「画聖はだんだん佳境に入る」の見出しを見つけて興奮して読みました。なんと四世紀後半に活躍した中国の画聖の奇行にスタートした言葉で

画聖はだんだん佳境に入る 阿辻哲次

（漢字学者）

2019.9.23 付日本経済新聞 朝刊

あったことを知り仰天しました。以下コラムから引用します。
かの画聖はサトウキビをいつも根元の方からかじって食べた。不思議に思った人がたずねたところ画聖はこうすれば「漸く佳境に入る」「つまりだんだん」とい（佳）ところ（境）に入っていく、と答えたという。凡人はおいしいところから箸をつけ、まずいところは後まわしの食べ方では芸術家の道はけわしいということなのだろうか。と阿辻先生は解説しています。

さて清水比庵は「毎日佳境」の作品をたくさん残していますが老境に入ってや々と完成に近づいたとの境地を詠った上記のような意味深いことを教えていただいたものと、この度改めて感じ入った次第です。

趣味や仕事でなにかに取り組んでいる時に、精神的状態がしだいに向上きになり、大いに興味が増してくることを「佳境に入る」という。「佳」は「佳作」や「佳人」という語にも使われているように「よい」とか「すぐれた」という意味の字で、「境」は「境地」というほどの意味である。だから「佳境」の二字で「よい状態」という意味になるのだが、この熟語に関しては、中国絵画史の上で「画聖」とよばれる顧愷之（こがいし）の奇行にまつわる話が出典となっている。▼顧愷之（三四六年頃～四〇七年頃）は幼少時からめざまれた環境の中で文学や芸術の基礎をばぐくまれ、やがて中国絵画史上で最高の評価をあたえられる画家となった。彼は仏教画や山水画を得意とし、特に人物画にたくみであったといい、代表作に「女史箴図（じょししんず）」や「洛神賦図」などがある（ただしどちらとも模本しか現存しない）。▼顧愷之の伝記は『晋書（しんじよ）』の「文苑伝」というところにある。「文苑伝」とは文学的才能の優れた人物ばかりを集めた伝記であり、そ

こに顧愷之が入っていることから、彼が画家としての才能だけでなく、文才においても傑出していたことがわかるが、その伝記の末尾に、当時の人々が彼にあてた評価として顧愷之に三絶あり、才絶、画絶、痴絶なり」と記されている。▼「絶」とは並外れた才能という語で、顧愷之の「才絶」と「画絶」は理解できるが、この一つの「痴絶」とは、「人並みはずれた馬鹿さ」ということであった。この時代の文学者や芸術家には奇行が多く、顧愷之も例外ではなかった。当時の学者や文人のエピソードを集めた『世説新語（せせつしんご）』によれば、顧愷之は甘蔗（かんしよ）（さとうきび）をいつも根元の方からかじって食べた。不思議に思った人がたずねたところ、顧愷之はこうすれば「漸（ようや）く佳境に入る」「つまりだんだんと佳境（い）るところ）に入っていく、と答えたという。▼まずおいしいところから箸をつけ、まずいところは後まわし、あるいは残す、というのは凡人の食べ方で、それでは芸術家への道はけわしい、ということなのだろうか。

今後の比庵展のお知らせなど

墨の美術館での比庵展

明年五月ころ実施の予定。詳細は次号に記載いたします。

第四回ウエストギャラリー比庵展

明年は秋（多分一〇月下旬）開催となるでしょう。詳細は次号に記載いたします。

高梁比庵会の「清水比庵大賞」について

今年の清水比庵大賞（第一〇回清水比庵大賞短歌の部）は三十四道府県及びブラジルから二三〇組四六〇首が寄せられました。その中から比庵大賞に選ばれた歌は次の通りです。

シベリヤより吹き来る風の冷たかり
返還して下され北方領土

比庵大賞の試みは隔年に開催されるので、次回が令和三年になります。応募要領は来年記載いたしますので、次回ご希望の方はその要領に従って明後年応募してください。

お詫び

十月に発行すべき十二号会報が一月以上遅延しましたことをお詫び申し上げます。十三号は明年春予定通り発行いたします。

会費納入のお願い

31年度の会費を下記に納入されますようお願い致します。

一口、1,000円（複数口歓迎）

三井住友銀行鶴見支店普通 7061558

名義 クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）

〒247-0022 横浜市栄区庄戸3-5-18

TEL&FAX 045-893-8932

URL: <http://www.hat.hi-ho-ne.jp/katashi-shimizu/>

幹事：比留間 哲生

〒247-0022 横浜市栄区庄戸3-25-7

TEL 090-4608-0488